

バ
ー
か
ら
始
ま
る

人物

白沢 竜也 (17) 高校生

蒲地 亜美 (18) 高校生

水木 香菜 (18) 高校生

○蒲地家・亜美の部屋（夜）

勉強机に向かう蒲地亜美（18）、丙
応大学の赤本を解く。

机の上に伏せたスマートフォンの通知
音が鳴る。

亜美、携帯を確認する。竜也から『俺
の部屋見て』と送られてくる。

亜美、溜息を吐いて窓開ける。

向かいにある白沢家の2階の窓から白
沢竜也（17）が顔を出している。

亜美「なにー？」

竜也、懐中ライトを亜美に向けて、

竜也「（モールス信号）明日暇？」

亜美「はあ…、なにー！」

竜也、スマートフォン操作する。

亜美のスマホが鳴って、亜美が確認す
る。

竜也から『モールス信号だつて。分か
るでしょ？』と送られてくる。

亜美、やれやれという感じのスタンプを送って竜也へ視点を合わせる。

竜也、懐中ライトを亜美に向けて、

竜也「（モールス信号）明日暇？」

と再度ライトを点滅させる。

亜美「暇じゃない。勉強！普通に言いなよ！」

竜也「（モールス信号）明日、河川敷のグラウンド来て」

亜美「分かった！河川敷のグラウンドね！」

竜也「（モールス信号）そう」

竜也、さっと窓を閉める。

亜美、怪訝そうに窓を勢いよく閉める。

亜美、スマホで、『モールスメンディ。

普通に言いなよ！』と竜也にメッセージ

ジを送ってメッセージアプリを閉じる。

直ぐに竜也から、『照れるから』と通

知のポップアップが来る。

亜美、既読をつけないようスマートフォンを閉じて、ベッドに投げる。

○河川敷・通り道（日替り）

制服姿の亜美と水木香菜（18）が歩
きながら。香菜は自転車を引いている。

香菜「また？」

亜美「うん」

香菜「今回は？」

亜美「モールス信号」

香菜「また、手の込んだ：、何回目？」

亜美「12回目」

香菜「よく覚えてるね」

亜美「毎月だもん。1年前から」

香菜「よく茶番に付き合うよね」

亜美「別に、そんな付き合っていないし」

香菜「でも、今日も行くんでしょ？ 告白ご
っここに付き合いに」

亜美「ごっこって言うなし。しょうがないじ
ゃん。幼なじみだし？ 腐れ縁ってやつ」

香菜「腐れ縁って言ってもさ、面倒くさくない？ そんなに振ってるなら、好きでもないんでしょ？」

亜美「振ってるっていうか、勝手に振られていってるから」

香菜「まあ、確かに。亜美、大学決まってるし、暇つぶしには丁度いいか。天下の丙応大学だしね」

亜美「天下って、東大受ける人がよく言うわ。模試、A判定なんですよ」

香菜「でもまだ受かってないから。亜美みたくにまだ暇じゃないわけ」

亜美「意地悪だなあ」

香菜「大学決まるまで、意地悪だよ。私、きつと。今勉強ばっかでエンタメ欠乏症だし」

亜美「私にぶつけないでよー。その意地悪」

香菜「まあ、いいじゃん。竜也話くらい教えてくれてもさ。前の告白は、どんなだっけ」

亜美「バク宙成功したら、付き合ってくれ」

香菜、笑って、

香菜「めっちゃおもしろいじゃん。それで毎回失敗してるんだもんね。竜也エンタメの才能あるよ！」

亜美「茶化さないでよー！」

香菜「ごめんごめん。ほら、いるよ」

香菜が河川敷のグラウンドを見る。亜美もつられて見ると、竜也がストレッチしている。

香菜「はい、いってらっしやいよ」

亜美「もう」

香菜、片手で忍者みたいに眼前に人差し指を立て、

香菜「私は、お邪魔だからドロンするわー」

香菜、自転車に乗って駆けてゆく。手を振って、

香菜「じゃあねー！ 明日教えてー」

亜美「うるさい！」

亜美、香菜から竜也に視線を移し、息を吸う。

○河川敷・グラウンド

竜也がストレッチをしている。竜也の横でサッカーボールがある。

亜美が歩いて近づく。

竜也「おう、用事？」

亜美「用事って、自分で呼んだんじゃない？」

竜也「どっちでもいいじゃん。暇でしょ？」

亜美「暇じゃないって、勉強してたんだから」

竜也「勉強って、亜美大学決まってるじゃん」

亜美「決まっても勉強はするの。竜也こそ

ヤバいんじゃないの？」

竜也「俺は良いんだよ。俺は。それより、イカしてたでしょ。昨日の」

亜美「なにが？」

竜也「モースから滲み出る、ノスタルジックってかエモってか」

亜美「全然エモくない。そんな時代に生まれてないじゃん」

竜也「そこを感じ取るのがさ侘び寂びってものよ」

亜美「はあ、でさ。そのエモいモ―ルスで呼び出して、なに？」

竜也「何って、そりゃあ、まあ。うん」

亜美「まあ？ うん？」

竜也「分かるだろ？」

亜美、そっぽを向いて、

亜美「分かんない！ ちゃんとやってくれないと分かんないもん」

竜也、ストレッチやめて、立ち上がり、

竜也「悪い、悪い。照れ隠しだから。いつも
の」

亜美、竜也のほうを見る。

竜也「俺と付き合ってよ」

竜也、グラウンド端のサッカーゴール
の上端を指さして、

竜也「あのポストにボール当てたらさ」

亜美「はあ、出た。できないでしょどうせ」

竜也「なんだよそれ、せっかくエモい感じに
言っただのに」

亜美「先月もバク宙で失敗してたじゃん。その前は、けん玉だっけ。んでその前もフリースローでさ」

竜也「そう言うなって。ほら今日こそ成功するからさ。そこで黙って見てなって」

亜美「まだ、良いなんて言っていないじゃん」

竜也「静かに。集中するから」

亜美は黙って、困惑そうに竜也を見る。

竜也、ボールから助走を取って止まる。

息遣いが荒い。

竜也「あー、もう」

竜也、落ち着きなくボールを蹴る。ボール

はポテポテとゴールに入る。

竜也「あー、くっそー」

亜美「だから言ったじゃん！」

竜也は膝をついてうなだれる。

亜美、ゴールからボールを拾ってくる。

亜美、竜也の近くにボールを転がし、

亜美「せめて上に外しなよ。覚悟なさすぎ」

竜也「うるさいな」

亜美「そういう所が嫌いだって言ってるの！

調子に乗ってさ。結局、ビビってさ」

竜也「いや、ごめん」

亜美、ボールから助走を取って、

亜美「大体」

亜美、ボールを蹴る。ボールはバーで跳ね返る。

竜也、溜息を吐き、立ち上がって、

竜也「サッカーで大学行くだけあるわ」

亜美「竜也と違ってビビってないだけ」

竜也「痛いこと言うなよ」

亜美「言われたくなければ、小細工なしで告白して来なよ」

竜也「：分かった。また、今度はそうする」

亜美「大学何処受けるか決まった？」

竜也「丙応大学。亜美と同じとこ」

亜美「じゃあ、丙応受かったら付き合ってる」

竜也「え？」

亜美「丙応受かったら付き合ってあげるって
言ってるの！」

竜也「マジか。やった」

亜美、グランドを後にしながら、振り
返って

亜美「今度こそ、成功させてよ」

竜也「分かっている！ 受かってやるから」

亜美、ふふふと笑う。

了